



- 体育会名: 関西学院大学体育会馬術部
- 創部年: 1930年(昭和5年)
- 2025年度会員数: 30人(4年6人、3年4人、2年8人、1年12人)

- 同窓倶楽部名: 関西学院大学体育会馬術部同窓倶楽部
* 関西学院同窓会 公認団体

- 同窓倶楽部通称:
 - 設立年:
 - 会員数:

* 物故者含む

1929(昭和4)年 関西学院が全校をあげて長年学び続けた「神戸 原田の森」から西宮上ヶ原の新設校舎に移転した。それを機に旧高等商業部に入学した松木乙彦氏他が、軍隊の馬術将校から指導を受け練習を開始した。学校当局は学生の熱意に動かされ、馬術部の部室を提供した。

30年、名実ともに「関学馬術部」が創設された。関西学生馬術連盟に加入し活動を始める。学生馬術大会にも参加し好成績を収めていった。39年、運動総部の総会で馬術部が認可を受け、部旗も制定。この年関西学校対抗馬術大会で優勝し5連覇を成し遂げた。

大学の好意により得られた場所に、学生たちが大変な苦勞の末に厩舎を完成させた。戦争のため活動は縮小したが、競技に参加し続け好成績を収めた。

終戦後、厩舎は残っていたので学生たちの苦勞の末、馬匹を調達し、西宮球場の高校野球大会でアイスキャンデーを売り、資金も調達した。47年、OB会「弦鞍会」が結成され、競技にも参加するようになった。関東遠征が初めて行われた。「米」持参の遠征であった。

47年から黄金時代が始まり、全国制覇を続けた。大学のみならず高等部も日本一になった。そのころ高等部馬術部は学習院高と定期戦を行っており、学習院には当時皇太子であられた上皇陛下がおられ、ともに全力で戦った。

58年、悲願の馬場用地の確保ができ、盛大に馬場開きの競技会を関学馬場で開催。大学も高等部も優秀な成績を残すようになる。64年東京五輪では、候補選手に障害馬術の佐々信三、総合馬術の勝本正則、本野善一が選ばれた。本野は馬の不調により参加できなかったが、佐々、勝本は本戦に出場した。(佐々氏の寄稿文より)

65年、厩舎が新築され、新たな活動時期に入った。それまでの貸与馬競技(学生が移動し移動先の馬匹に乗合をし、優劣を競う)が自馬競技に移行していき、優秀な馬匹の確保が重要な課題となった。部員はアルバイトで資金を確保し飼料、馬具、輸送費などを工面して活動を続けた。

70年ごろの学園紛争に関学も巻き込まれ、第5別館には全共闘の学生が立てこもり機動隊との抗争が続いた。当時厩舎はこの第5別館に隣接していたため、夜中にはヘルメット姿の学生が歩き回り、催涙ガスが充満するなどし、馬を離れた馬場に避難させ数日を過ごした。

73年に関西学生大会の自馬競技で初めて団体関西制覇を果たした。70年代後半からは大学、高等部ともに好成績を収め、82年には高等部馬術部が全国制覇を成し遂げた。87年には厩舎を全面改装し、91年から王座決定戦で3連覇を達成する。

95年に起きた阪神大震災では厩舎、馬たちには被害はなく、部員にも怪我はなかった。しかし水や飼料など様々な問題を抱えることになる。OB 会などの援助を受け、97年ごろから再び競技成績が向上していく。春の学生大会で9連覇、総合競技での9連覇など素晴らしい成績を収めていった。

2001年、高等部馬術部が50年の歴史に幕を閉じた。高等部の事情によるものだが、OB たちの必死の懇願もむなしく、無念の活動終了となった。

06年に第3フィールドが完成。馬術部も馬場・厩舎を移転し、新しい時期に入った。それまでは厩舎、馬場が離れていたためいろいろな問題があったが、移転により厩舎、馬場が同じところで活動でき、学内という好立地であるため学生にはより良い活動場所になった。学院当局、関係者、そして多大なご支援を頂いた OB 会の皆様の力添えでできたことを部員一同感謝し、そして期待に応えられる素晴らしい馬術部にしていかなければならない。



1964年東京五輪の障害馬術競技に出場した佐々信三氏(馬術部アドバイザー)が2006年、関学倶楽部で馬術部についての講話をした。一部を抜粋する。



佐々信三 1964 東京オリンピック

「馬と私の人生」

昭和10年、生まれは大阪、ほとんど西宮北口で育つ。23年新制2期中等部入学、高等部を経て33年大学経済学部卒業。中等部からの同期には元学院理事長の山内一郎、オリックス会長の宮内義彦君がいました。卒業後は先輩の和田俊一さんの父完二氏が社長を務めていた丸善石油に就職、のちにはつばめ砒油の社長をつとめ平成 17 年に西宮に戻り倶楽部の後進育成に当たっています。

当時の馬術部は大変強く、大学は全日本大学王座で4連勝するなど文字通り日本一。私も在学中は高校3年でインターハイ団体優勝、大学3年では大学王座を獲得しました。

卒業した昭和33年という時代は日本の戦後経済の復興の取っ掛かりのような時代であったと思う。「銀行よさようなら、証券よこんにちは」といった第一次証券ブームであった。和田社長は大変馬が好きで会社にも馬術部がありました。毎朝、今はもう無い神戸乗馬倶楽部に通

いました。自家用車の持てる時代ではなく毎朝一番電車でした。そして39年の東京オリンピック開催が決まる。それに備え「飛燕」という優秀な馬が和田社長の手によりニュージーランドから輸入されました。本野善一1年先輩が私に乗れよと言ってくれ、大きなチャンスを与えて頂いたことには今でも感謝をしています。厳しい予選を経て候補者から代表選手に選ばれ現実のものとなったわけです。

私のオリンピックの成績は個人で46頭中38位、団体では14国中12位でした。これでも日本のチームでは一番良い成績でした。和田社長が買われた「飛燕」で予選に勝ちあがっていたが、実際には「スネーフェル」という当時日本馬術連盟がオリンピックに備えてアイルランドから輸入した馬に乗りました。今オリンピックに出るような馬は1億円以上とされるので当時でも大変高価な馬でした。

こうして私はやっと国際競技のレベルを身をもって知ることとなりました。翌年にはスネーフェルで日本選手権の大障害競技を取ったことで次のメキシコ大会に備えヨーロッパに派遣されることになり、会社は休職を認めてくれました。かつて神聖ローマ帝国の都がおかれたまちアーヘンで行われる競技はヨーロッパで最大のものです。つまり世界一の競技ということです。ここでは幸い何回かの競技に出場した内で3位に入賞することができました。

私が西ドイツにいた頃、日本馬術連盟の会長でありかつIOCの会長であった竹田恒徳氏が視察に来られました。竹田宮です。そのご子息が今IOCの会長をされている竹田恒和さん、私より一世代下の馬術オリンピック選手です。父上は昭和天皇のいとこですからロイヤルファミリーです。たくさんマスコミが押しよせました。

馬術競技で特記すべきは男女差が無いということです。どの競技も男女がまったく平等な条件で同じ種目を競うスポーツは馬術だけではないでしょうか。また、日本では馬術はマイナーなスポーツですが世界的に見れば極めてポピュラーなスポーツです。日本で余り人気のない原因としては第一に金のかかるという偏見があり、実際にヨーロッパではハングリースポーツとも言えます。金を稼げるのでハングリーな階層出身が多いようです。第二にはやはり国民性の違いで、農耕民族と騎馬狩猟民族の差でしょう。三番目には平坦な草地の少ない日本の地

勢の違いでしょう。

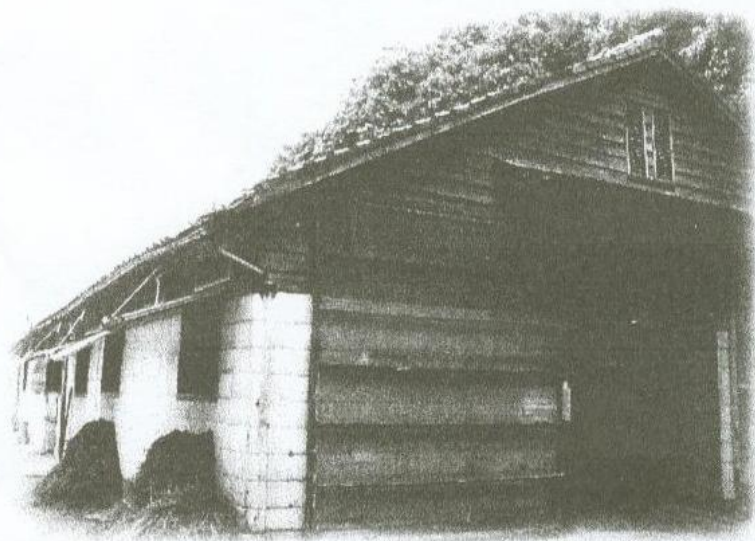


佐々信三 1965 西独アーヘン国際競技会

西ドイツでは約 滞在して各地の競技会に出場し、良い経験を積むことができました。残念ながら次のメキシコ大会では最終予選で敗退し出場に至らず、また本業の方も忙しくなり国内の競技に専念するようになり、昭和47年に再び全日本の選手権(大障害はまゆう号)を獲得したのを機会に競技の世界から退きました。60歳のときには、広島県で国体が開かれたので還暦の記念に出場し、最高齢ながら入賞することができました。

ようやく西宮に帰ってからは、早速 OB 会長を命じられ同時に学生達を教える事になりました。馬術というスポーツは体力も要りますがどちらかと言えば経験が必要なスポーツです。今でも毎朝2頭くらいに乗り指導に当たっています。今までは厩舎と馬場が離れているため、いろいろな制約やリスクがありましたが、新馬場と厩舎だとそれが解消します。老骨に鞭打って今後も元気な間は馬に乗り後輩達を教えていきたいと思っています。

部史 編集担当者 岡本正義 (S49卒)



旧厩舎の由来

昭和3年、神戸原田の森に産声を上げた馬術部は、上々原に移転後阪神乗馬倶楽部に乗馬三頭を預託し、倶楽部の貸与馬と併せ練習に精励し、昭和14年に至り体育会入会を果たした。

昭和15年、馬術部々長深山盈二教授や諸先輩の熱意と努力に依り、学院当局から構内西端の不整地(竹藪)の提供が実現し部員はその伐採、地均し等の作業に励み、厩舎建設が推進され、翌昭和16年4月竣功した。

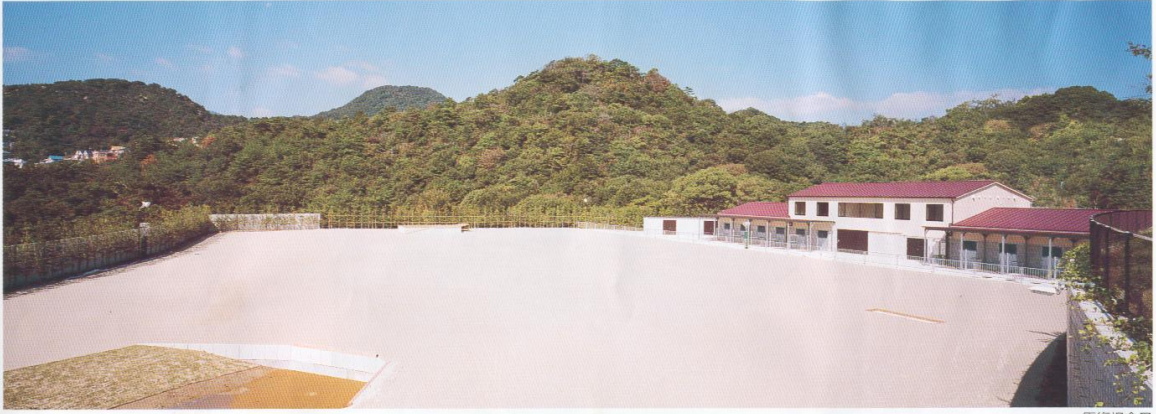
厩舎の概要	厩舎	約42.5坪
	土地	約300坪
	建設費	部員の保護者からの寄付 部員吉川彰一君の父君からの特別寄付

爾来、修理・補修を重ね星霜65年、馬術部の本丸として重宝された旧厩舎の由来と存在を記念し、ここに銘記する。

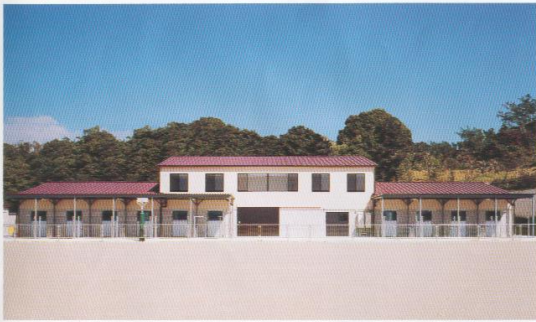
平成18年10月

関西学院大学馬術部

弦 鞍 会



馬術場全景



馬術部厩舎外観



馬術部厩舎内観

